愛知教育大学研究報告，49（人文・社会科学編），pp. 252～247, March, 2000

復活する昔男―伊勢物語四九～七六段に見る二度の〈再生〉―

田口尚幸
（国語教室）

一　序

伊勢物語を今あるがままの姿で読もうと思う。成立論の頼りなさと不毛さは既に証明したし（注1）、それに対する反論もない。現前の伊勢物語をどう読めるか。我々に残された視座はもうこれ以外にない。

私は、伊勢物語の群小章段を主要章段と分け隔てなく読んできた。一段から四八段までの読みを、三本の論文で展開してきた（注2）。今回は四九段から七六段をとりあげる。これまで以上に群小章段が多く、一見するとつまらなさそうな部分だが、私の読みは章段どうしの繋がり＝相補的関係のなかから新たな意味を見出していく読みだ。従来なかったような読みの深化を示すことができるだろう。単独で見た場合には群小章段でも、配列のなかに意味がある。それを証明し、相補論の楽しさを提示することが、この論文も含めた配列順相補的解釈シリーズの目的なのだ。

四九段～七六段は、大きくわけて、四九～五七段・五八～六三段・六四～七六段に三分される。はじめの四九～五七段は、言葉遊び的レトリックの用例集のような章段群で、物語世界に影響するような内容は特にない。とばしてしまってもかまわないくらいなのだが、シリーズのなかで空白をつくるわけにもいかないので、ごく簡単におさえておく。つづく五八～六三段は、仕切り直し的な意味をもつ、節目となるような章段群。五九段で昔男は一旦死に、復活してミヤビのモラルとイロゴノミの権威をとり戻す。最後の六四～七六段は、冒頭の六四段と末尾の七六段が六五～七五段をはさむ構造になっていて、はさまれた六五～七五段ではまだ権威になりきっていない頃の若さが描かれている。実際、昔男は六五段で若返っているし、末尾の七六段にはタイムスリップから元の時間に戻るような雰囲気がある。副題に掲げた「二度の〈再生〉」とは、一度目の〈再生〉が五八～六三段の仕切り直し、二度目の〈再生〉が六四～七六段の若返り、ということだ。

二　レトリック用例集

まず、四九～五七段とその前の章段群との繋がりを見ておこう。

前稿では、昔男が一旦死ぬ五九段にまで先回りして、

三八～四八段には、〈連帯〉に安息し、〈孤高〉から脱却する優しい昔男の姿があった。しかし、昔男は、その過剰なまでの優しさを五九段以降までひきずらない。一度死ぬことで甘さを拭い落とし、〈孤高〉の昔男へと回帰していく。

と述べた。四八段以前には優しさが描かれ、五八～五九段あたりからは本来の姿に戻る。

では、四九～五七段はどうだろうか。四八段以前の優しさを引きずっているわけではないが、気の抜けた雰囲気は引きずっている。シリアスな物語世界からは一旦離れ、直後の五九段の仕切り直しに頼るかのように、軽い章段が連なる。歌物語の伊勢物語では、各章段に必ず歌がある。歌にはレトリックがある。特に古今時代の歌には、まるで子供の謎々のような理屈でかためられたレトリックが多い。そういう類の歌を集めたのが四九～五七段だ。読者は子供の謎々につきあわされることになる。小休止、と言ってもいいだろう。

四九段は、言葉遊びを宣言する章段。

昔、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ

ときこえけり。返し、

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな

男の贈歌は、「ね」に「根」と「寝」を、「結ばむ」に「草を結ぶ」と「契りを結ぶ」を掛けた技巧的な歌で、異母妹＝「若草」を女として見るという変わった内

容の歌だ。女の返歌にも、「初草」―「葉」―「うら」といった言葉に技巧が凝らされている。知の贈答、と言っていい。内容はこの際問題外だ。実際、その後は描かれない。眼目はレトリックにある。

つづく五〇段は、ありそうにないことやできそうにないことを譬えに用い、男女が「あだくらべ」をする話。五首にわたって同種のレトリックがつづく。レトリックばかりに力が注がれ、内容は二の次といった感がある。

五一～五七段には、非常に短い章段ばかりが連なる。歌はどれも一首のみ。地の文の行数は、『集成』で言うと、歌前部一行が五章段、二行が二章段。歌後部があるのは、「とて、雉子をなむやりける」の五二段しかない。伊勢物語のなかでもとりわけ短い章段が集まっている箇所だ。たとえば前々稿「イロゴノミとして成長する昔男―伊勢物語二一～三七段に見る積層構造―」でとりあつかった二一～三七段のなかにも二五～三七段のような短小章段の集合はあったが、それらより極端に短く、内容の連続性も読みとりにくい。二五～三七段は、一つ一つは短いながらも、相補的に繋ぐことによってイロゴノミとして成長していく昔男像を読みとり得た。他に繋がっていく内容の連続性があった。しかし、五一～五七段はやや異なる。ごくごく簡単な説明があって、昔男の歌があって、それで終わってしまうため、内容的な重みがなく、レトリックの技巧ばかりが印象に残る。積極的に連続させていこうという気にはなれない。かろうじて、片想いを嘆く五四～五七段くらいは、片恋の苦しさゆえに隠棲したと読めば、長岡隠棲の五八段・東山移住願望の五九段に繋がらなくもないが、その五四～五七段ですら、「あだくらべ」の五〇段同様、切実さはあまり伝わってこない（言葉遊び章段の後にくる配列も、軽さの一因となっているだろう）。おそらく、ここらあたりは、歌の表現の妙を主に見ておけばいいだろう。

四九～五七段は、後につづく復活章段群の仕切り直しをあてにした小休止、と読んでおこう。

三　一度目の〈再生〉

ここから本題に入る。

五八段に入り、昔男は襟を正す。長さも、この段からは平均的な長さに戻る。内容は、長岡で風流に暮らす昔男の家に不作法な女たちがあがりこみ、昔男を辟易させるというもの。風流／不作法という対立がある。昔男は「心つきて色好みなる男」として紹介され、女たちからも「すき者」と見られているように、イロゴノミとしての地位が確立されている。ミヤビとかイロゴノミといった概念は伊勢物語本来の価値観だ。五八段においては、それが久々に高らかと喧伝されている。

実は、五八～六三段のうち、五九段を除く四章段では、いずれも昔男に絶対的価値が付与されている。六〇～六三段の相補的解釈は、既に「伊勢物語の相補的解釈―その序説としての試論―」（注3）において論じた。六〇・六二段における昔男は、ミヤビを捨てて都落ちした元の妻に制裁を加える。ミヤビの具現者として、ミヤビの〈モラル〉破戒者を否定する（注4）。六一段では、はるか筑紫においても「色好むといふすき者」と噂され、六三段では、見ず知らずの九十九髪の老女にまで憧れられる有名人になっている。六〇・六二段の制裁を正当化するかのように、昔男の絶対的価値が顕示されているのだ。

前稿「〈連帯〉に安息する昔男―伊勢物語三八～四八段に見る〈孤高〉からの脱却―」でとりあげた三八～四八段あたりから、昔男は優男化している。私は、これを、「一～三七段の反動」と読み、「行きつ戻りつの人生を具現している」とも述べた。そして、

つづく五九段の再生と六〇・六二段の制裁も、三八～四八段の反動と読めばいい。

と予告しておいた。一度目の〈再生〉五八～六三段は、三八段以来の長い安息からの覚醒と読める。絶対的価値を付与するために費やされる四章段の質量は、それまでの眠りの深さ・長さに比例している。眠りが深く長いほど、本来的価値観を再認識させるためには、明解な章段を一定量用意する必要があった。そう読んでおこう。

一旦殺してリセットするのも有効な方法だろう。

五九段の本文を示す。

昔、男、京をいかが思ひけむ、東山に住まむと思ひ入りて、
　住みわびぬ今はかぎりと山里に身を隠すべき宿求めてむ
かくて、ものいたく病みて、死に入りたりければ、面に水そそぎなどしていき出でて、
　わがうへに露ぞおくなる天の河門わたる舟の櫂の雫か
といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

この死、大局的に俯瞰すれば、三八段以降の甘さを払拭する仕切り直しと読めるのだが、直前の五八段からの章段群内の細部の繋がりもおさえておきたい。思えば、五八段における昔男は、昔男らしくなかった。一言で言えば、「逃げ隠れする昔男」とでも言おうか。

こともなき女どもの、田舎なりければ田刈らむとて、この男のあるを見て、
「いみじのすき者のしわざや」とて集まりて入り来ければ、この男、逃げて奥に隠れにければ

とある。「逃げて奥に隠れ」るという行為は、長岡隠棲の延長線上にある。長岡に隠れ、さらに家の奥に隠れる。女たちを揶揄する歌は詠むものの、優男の印象が強い。五八段は、〈再生〉のはじまりではあっても、本格的には〈再生〉していない。つづく五九段の冒頭にも隠棲志向は示される。隠棲へと向かいつつある流れがある。五九段の突然死は、その流れをも遮断する。隠棲などまだまだ早い、と止めているかのようだ。

ちなみに、五九段「京をいかが思ひけむ、東山に住まむと思ひ入りて」は、東下りを思い出させる。七段「京にありわびて東にいきけるに」、八段「京や住み憂かりけむ、東のかたにゆきて住み所求めむとて」、九段「身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東のかたに住むべき国求めに、とてゆきけり」。よく似ている。「東山」と「東」も一字のちがいで、ともに東の方角だ。住もうとした地に落ち着けない点も同じ。東下りした昔男は、自己のミヤビ至上主義を確認して帰京。東国が安住の地でないことを悟る。伊勢物語は、昔男の東国安住を許さない。同様に、東山隠棲も許さない。戦線離脱を許さない場面が、繰り返し描かれているのだ。

さて、本格的に〈再生〉した昔男は実にパワフルだ。方角は、東と正反対の西（九州方面）になる。東国や東山が逃避を意味するなら、西は征伐を意味する。弱さと強さ。迷いと信念。方角の対照性は、そうした対照性をも象徴しているかのようだ。六〇・六二段では、都落ちした元の妻をわざわざ捜し出して制裁を加えている。もはや「逃げ隠れする昔男」ではない。その逆で、都からのミヤビの具現者として、ミヤビの〈モラル〉の番人として、あたかも独裁者のように振る舞う。六〇・六二段に並行する六一・六三段においては、イロゴノミのヒーローとして振る舞う。六一段では、筑紫の女に「これは色好むといふすき者」と言われ、

染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ

と、開き直りともとれる堂々たる歌を返す。五八段でも「いみじのすき者のしわざや」と言われていたが、あの時は「逃げて奥に隠れ」た。昔男に逞しさが戻ってきている。憐憫の情から老女と共寝をしてやる六三段に至っては、強さとか信念とかいった次元を超えて、余裕の境地にまで達している。イロゴノミの代表格として有名な存在。老女の小細工にも気づかぬふりで接する。全知的であり、慈愛に満ちてもいる。絶対的な高みにいる。〈再生〉を通り越し〈完成〉の域に達してしまった感もあるが、昔男がここまで復活している点をおさえておきたい。

仕切り直しという意味では、ミヤビやイロゴノミや強さを印象づける五八～六三段の一度目の〈再生〉は成功している。しかも、徐々に復活していく〈再生〉の過程を追うこともできる。隠棲志向の優男から強力な絶対的存在へ。最後には余裕すら見せる。復活物語として十分楽しめる。

四　二度目の〈再生〉

だが、何か欠けてないだろうか。昔男は完成されてしまった。悩みもがく姿は見られない。一度目の〈再生〉は、勢いをつけすぎ、一気に権威へと駆け上がってしまったかにさえ見える。

それを修正して元の軌道に戻すのが、六四～七六段の役割なのかもしれない。ここでは、まず、六四～六五段において二条后物語が甦る。六五段では昔男が殿上童として若返っており、若かりし頃の懊悩までも甦っているようだ。その次にくるのは、征伐の西下りとはちがう、憂いの逍遙だ。逃避の東下りに近い。伊勢物語では、三～六段で二条后物語、つづく七～一五段で東下り物語、という構成になっており、その再現にも見える。そして、最終の七六段において時間は〈語りの今〉に戻り、昔男は「翁」になっている。二条后と過去を懐かしむ大人になっているのだが、権威ではない、影のある、渋味のある昔男になっているのだ。定位置に戻ってきたような安心感を私はおぼえる。

なお、二条后物語から逍遙物語へというプロットの繰り返しについては、既に深町健一郎の指摘があり（注5）、類似の指摘は深町にプライオリティーがある。以下には既に深町によって指摘済みの類似が多いことを予め断っておく。ただ、だれた三八～五七段の反動として〈再生〉を意味づけ、その〈再生〉についても、一度目のとりこぼしを二度目がカバーすると解釈するところに、私のオリジナリティーがある。屋上屋を架しているように見えるかもしれないが、より相補的に読もうとしている点を理解されたい。

では、六四～六五段から見ていこう。

六四段の本文を示す。

昔、男、みそかに語らふわざもせざりければ、いづくなりけむ、あやしさによめる。

吹く風にわが身をなさば玉簾ひま求めつつ入るべきものを

返し、

とりとめぬ風にはありとも玉簾誰が許さばかひま求むべき

相手の女が入内後の二条后だということは容易に想像できる。彼女は今玉簾の内にいる。后として昔男の手のとどかない場所に移ってしまった。昔男ができるのは、反実仮想で逢瀬を想像するくらい。女もまた駄目押し的に逢えないことを詠んでいる。これまの伊勢物語の諸章段のなかで最も懊悩が深かったと言えば、三～六段の二条后物語だろう。その物語が時を経て甦る。時間の経過は二人の隔絶を決定的なものにし、昔男は何もできない。甦る懊悩。ついさっきまで権威だった昔男は、今度は后という権威の前に何もできず、かつての悩みもがく昔男に戻る。二度目の〈再生〉は、当事者的懊悩を描くという点で、真の〈再生〉と言える。シリアス路線が伊勢物語の本流なら、完全に軌道に戻ってきたと言っていいだろう。

六五段の「殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだいと若かりける」という紹介は、昔男が殿上童であることを意味している。タイムスリップが起きているのだ。前段の六四段から登場してきた二人は回想シーンに入る。ここでの昔男は、伊勢物語のなかで最も破滅的だ。二条后とおぼしき女から「いとかたはなり。身もほろびなむ。かくなせそ」と咎められるほどに。実際、「身もいたづらになりぬべければ」という状態になり、配流の憂き目にもあう。ちなみに、昔男の恋敵として登場する「帝」は、実に対照的なキャラクターだ。至上の地位、厚い信仰心。下働きで、仕事もでたらめ、仏神にも見放された昔男の対極にある。「この帝は顔かたち良くおはしまして」という紹介も、端正で凛然としたルックスをあらわしているのだろう。昔男とて美男子ではあろうが、こちらにはデカダン的ムードが漂っているはずだ。正と負。光と影。対照化によって、より昔男の惨めさが際立つ。権威などもう跡形もなく消し飛んでいる。懊悩の二条后物語を思い出すとなれば、六四段だけではまだ不十分だったのかもしれない。六五段はどっしりと重く、章段自体も長大だ。若さゆえの曲折が十分に看取できる。

六六～六八段は、摂津・和泉・河内といった近郊の鄙の地を親類縁者と逍遙する話。東下りの八・九段においても、「友とする人ひとりふたりして」・「もとより友とする人ひとりふたりして」とあり、九段では仲間の一人が「旅の心をよめ」とリクエストしていた。人々は、昔男の歌に、「みな人乾飯の上に涙落としてほとびにけり」とか、「舟こぎりて泣きにけり」といった反応を示した。対する六六・六七段においても、「あにおとと友達ひきゐて」・「思ふどちかいつらねて」とあり、六八段ではやはり仲間の一人が「住吉の浜とよめ」とリクエストしている。昔男の歌を聞いた人々は、六六段では「あはれがりて人々かへりにけり」、六八段では「みな人々よまずなりにけり」となる。どちらも二条后物語の直後に、似たような場面が設定されいるのだ。そもそも、全体のトーンが近似している。六六～六八段の歌をあげる。

難波津をけさこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟
きのふ今日雲のたちまひかくろふは花の林を憂しとなりけり
雁鳴きて菊の花さく秋はあれど春のうみべに住吉の浜

「うみ＝憂み」・「憂し」・「うみ＝憂み」が共通している。薄暗い色調だ。諦観にもとづく憂情が漂う。この世を憂き世ととらえる六六段。六六段歌後「これをあはれがりて、人々かへりにけり」というのは、詠者の憂情が人々にも伝わったということだろう。六七段の歌はこの世を憂き世と見る歌ではないが、「曇りみ晴れみ、たちゐる雲やまず」という不順な天候を、雲が「花の林」を見せないように意地悪しているととる。心地よい状況でないことは言えるだろう。六八段は、春の住吉の浜を、憂き世のなかでは住みよい浜だと詠む。癒されたのではない。むしろ、鄙の地で癒しを求めねばならない寂しい現状を読みとるべきだ。歌後の「とよめりければ、みな人々よまずなりにけり」は、六六段同様、詠者の憂情の伝染と読んでおきたい。晴れない、憂いを含んだ心境で、これまた東下りの悲愁に近いと言える。東下りを連想させようとしているかのような印象さえ受ける。おもしろい配列だ。若さゆえの当事者的懊悩を描くとすれば、二条后物語から東下り的逍遙物語への移行は似つかわしい。

さて、伊勢物語は、次にメジャーな章段群を迎える。六九～七五段の斎宮物語だ。なかでも六九段は、斎宮との密通を描いた章段としてよく知られている。これに言及した論文も多い。多くの論文は、斎宮物語を、禁じられた恋の物語として二条后物語と並列して扱っているようだ。

しかし、そうした概括的あるいは表層的解釈に異を唱えたのが、前掲「伊勢物語の相補的解釈―その序説としての試論―」だ。読みの詳細に関しては直接論文を参照されたいが、大まかに言うと、六九段にある「斎宮なりける人の親」という情報に注目し、斎宮すなわち紀静子が、その兄紀有常と同じく没落紀氏の影を纏っていると読んだのだ。話の筋には関係ない母親の登場に意味をもたせ、紀有常への友愛を描く一六段との相補的関係を説いた。また、伊勢も所詮は田舎にほかならないことを七一・七五段が補足しているとも述べ、二段の西の京の女や一・二〇・二三段の大和の女と同様の「共感すべき人物」として位置づけた。そして、斎宮紀静子と二条后藤原高子を同列に論じることの非を指摘したのだった。

今、この論文を読み返してみると、一六段との相補的関係を説いている点に改

めて興味を引かれる。と言うのは、三～六段・七～一五段／六四～六五段・六六～六八段の二条后物語―逍遙物語のパターン繰り返しの先に、さらに、紀氏との共感にもとづく連帯の物語までもが繰り返されていると読めるからだ。パターン繰り返しという意味では、ここらあたりまで含めていいように思う。共感を描く一六段は非常に本質的な重要章段だから、対応関係があるとすれば、ぜひおさえておきたい。六九段に入り、ますます伊勢物語の本流に戻ってきたようだ。

七五段。この章段は、都の女を伊勢に誘い、断られる、という内容だが、伊勢を田舎として印象づける役割のほかに、舞台を都に戻す役割がある。時間の流れは六五段のタイムスリップ以来つづいている流れに従っていて、まだ〈語りの今〉に戻ってはいないが、まずは、空間的に伊勢から都へと戻っているようだ。

七六段は本文を示す。

昔、二条の后の、まだ東宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみてたてまつりける。

大原や小塩の山も今日こそは神代のことも思ひいづらめ

とて、心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。

ここではじめて「翁」という呼称が用いられ、以後たびたび昔男は「翁」として登場する。なぜ「翁」の初出が七六段なのか。もちろん、伊勢物語は昔男の一代記的配列をとっているから、後半になれば年をとって「翁」にはなるだろう。また、七六段自体「神代のこと」＝二人の過去を回想する話だから、時間の経過を知らしめるうえで「翁」の呼称は効果的だし、「翁」は言祝ぐ役割を担う存在でもあるから、その意味でもここでの「翁」の呼称は自然だ。が、見逃してならないのは、六四段・六五～七五段・七六段という構成のなかでの効果だ。昔男は、タイムスリップして若返り、そして、〈語りの今〉に戻ってきた。その時、昔男は「翁」になっていた。章段群内のタイムスリップの揺り戻しを印象づける際にも、「翁」の呼称は有効に機能しているのだ。

内容的には、対をなす六四段に近い状況下での心境を描いている。歌後の「心にもかなしとや思ひけむ」が、昔男の心境なのだろう。五八～六三段の一度目の〈再生〉では絶対的権威だった昔男も、さすがに相手が二条后となるとそうもいかない。悲愁の昔男。完全に本流のシリアス路線に切り替わっている。一度目の〈再生〉の補正も完了した感がある。

五　結び

昔男は、試行錯誤が好きらしい。そう私が読んでいるだけなのだが、読めることは確かだし、読み自体もおもしろいものになっていると思う。スカスカの群小章段を読むのは確かにつらかった。前回と今回のはじめの方は特に。しかし、群小章段を丹念に読みこみ、それらを主要章段と絡ませることで、紆余曲折する昔男像が浮かびあがってくる。もちろん、昔男は連続して一人のままだ。成立論のように「第何段階の昔男」が何人もいるわけではない。あの章段の昔男はいいが、この章段の昔男は嫌いだ、などと言うこともない。一人の昔男が、様々な経験に対応して生き方を変え、それでも結局は本来的な生きかたに収束していく。相補論は、成立論的章段差別を捨て、いかなる章段をも分け隔てなく関連づけることで、そうした魅力的な昔男像を手に入れたのだった。

今回の読みでは、一時期だれて、再び本来の姿に戻っていく昔男像を読みとった。だれて、また元に戻る。誰の人生にもよくあることだ。それが昔男にあっても不思議ではない。また、伊勢物語のプロットも唐突ではない。前章段群の反動あるいは補正といった概念で説明できるはずだ。伊勢物語は、否、相補論で読む伊勢物語は、おもしろい。今回も、これまで同様、そう痛感した。

なお、本稿を含めた配列順相補的解釈シリーズや成立論批判などの諸論文は、愛知教育大学国語教室田口研究室のホームページでも閲覧できるようになっている。http://www.kokugo.aichi-edu.ac.jp/taguchi/taguchi.html にアクセスされたい。

注

1　「成立論から相補論へ―新世紀の伊勢物語研究―」（新典社から近日刊行予定の王朝物語研究会編『論叢　伊勢物語1―本文と表現―』に収録）。

2　「原体験へと回帰する昔男―伊勢物語一～二〇段に見る〈心〉と〈かたち〉の二元論―」（風間書房から近日刊行予定の平安文学論究会編『講座　平安文学論究　第十四輯』に収録）。「イロゴノミとして成長する昔男―伊勢物語二一～三七段に見る積層構造―」（愛知教育大学「国語国文学報」平11・3）。「〈連帯〉に安息する昔男―伊勢物語三八～四八段に見る〈孤高〉からの脱却―」（「愛知教育大学大学院国語研究」平11・3）。

3　福井貞助編『伊勢物語―諸相と新見―』平7・5風間書房に収録。

4　「伊勢物語の〈モラル〉―美的規範あるいは補償行為としてのミヤビ―」（「日本文学」平9・6）。

5　「定家本『伊勢物語』の構造をめぐつて」（「中古文学」昭59・10）。「二条后物語の二回型構

造―『伊勢物語』構造試論（二）―」（早稲田大学教育学部「学術研究―国語・国文学編―」昭61・12）。

（平成11年9月10日受理）